

6/6(土) ま〜ど！ 今週も「今週の倫理」をお届けします。歩くことの「歩き方」をテーマに、歩く心！

今週の

歩くアホ一鳥

2020.6.6～6.12

倫理

6月のテーマ リーダーの自覚

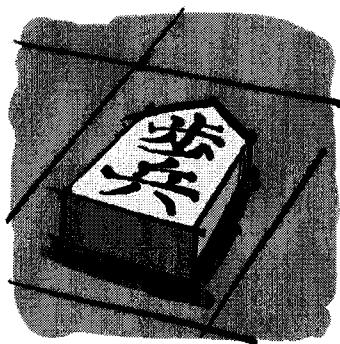
1180号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一～一九九九）のことばを掲載いたします。

将棋で長を王将にたとえるなら、一般の人たちは歩だと思う。飛車、角、金、銀その他のいろいろなものがあるわけだが、歩という駒は、一つだけしか先に進めず、横にも後にもさがれない、いわばもつとも能力の低い駒である。しかし将棋の格言というものがいろいろあって、その中に、「歩のない将棋は負け将棋」というものがある。

たしかに王将ばかりでは将棋にはならぬ。もつとも数の多い歩、これがたいせつなのだ。会社でもどこでも、長ばかりではしようがないのだ。それよりも歩になりきる心、これが重大ではないか。一歩一歩と確実に進む。断じて後にはひかないぞというその気概。これで毎日の仕事をしつかりとやっていく。間ぬけといわれようが、のろまどあざけられようが、馬耳東風とばかりに、ぐいぐい仕事にうちこんでいく。長のいうことはきくが、長の地位を狙っているのではない。一兵卒でもよい。最前線にあっても、強い相手のまつ正面にとり組まれてもよい。地位は最下位でもよいから、とにかくすべき仕事をひとつ、ひとつ、しつかりとまちがいなく片づけていく。この心つゝがけがもつとも尊いのではなかろうか。

地位とか、身分とかを願うな、といつても、それは無理ともいえよう。長にはなる



## 歩になりきるこころ

丸山竹秋

まいと思うこと自体が、ふつうの人には至難のわざだろうと思う。中には、「われ万人の下僕とならん」と最下にあることを念願した人もあるが、ふつうではなかなかできないことである。しかし長たることを目的とするよりも、毎日の仕事をたとえ下積みでもよいから、よろこびをもつて、しっかりとやつていこうという歩のこころのほうが、はるかに尊いのである。世間歩がなきや成りたたぬ、のである。

長などという役目は、自分から求め、運動してなるのではなく、自然に他から認められ、推されてなるものである。実力がないのに長になつたところで、苦しいばかりだ。やがて転落が目に見えてやつてくる。ところで、この歩になりきるということが、じつは安易なことではできないのである。どつしりとした歩にもなり得ず、吹けばほんとに飛んでしまう、そうした軽々しい存在になりやすい。

「じつを申しますと、あなたなんか、ここにいてもいなくてもよいのです。できればやめて頂きたいのですが」とまわりの者から、ひそかに思われるようになつても、どうしようもない。仕事ができる人でも、ねたみが強かつたり、つまらぬことにすぐ腹をたてたり、反抗ぐせが強かつたら……。そうしたところはそのつど、反省研究して、すこしでも改めていくようにしたいものだ。もちろん能力がないというようでは話にならないから、これも一つ一つ磨きあげていくことにしよう。(『いかに乗り切るか』より)